「歌舞伎」の魅力を知る〔音楽・演出編〕

歌舞伎には、歌や演奏、きらびやかな衣装、ド派手な化粧やかつらなど、楽しめる要素が満載です。セリフも内容もわからなくて楽しめないというひとは、まずは音楽や演出といった物語以外の要素に注目してみてください。一度観ただけでは気づかなかった、歌舞伎の面白さを発見するかもしれません。

重要な役割を担う音楽

歌舞伎に用いられる音楽には、舞踊の伴奏音楽としての役割と、舞台の効果音としての役割「下座音楽（げざおんがく）」があります。

歌舞伎の伴奏音楽として生まれた長唄は、唄と三味線と、鳴り物と呼ばれる打楽器や笛の楽器隊とで構成され、下座音楽も担当します。伴奏音楽には、長唄のほかに、「清元（きよもと）」、「常磐津節（ときわずぶし）」、「義太夫節（ぎだゆうぶし）」があり、どれも三味線と唄または語りで構成されます。

下座音楽は、舞台の下手にある黒い簾のかけられた「黒御簾（くろみす）」という部屋の中で演奏されるので、「黒御簾音楽」とも呼ばれます。三味線や打楽器、笛、唄などで、江戸の街の雰囲気や、雨音や波といった自然現象などを表現します。幽霊が登場するときの「ヒュードロドロ…」という効果音も、下座音楽です。

衣裳を見れば素性がわかる

歌舞伎の衣裳は、演じる役の身分や立場、性格などをわかりやすく表すために、色や柄などが誇張されています。人目を避ける役柄は紫の着物、田舎娘は緑色の着物、恋するお姫様は赤い振袖、悪者を退治する正義のヒーローは派手な衣装というように、歌舞伎の衣裳には独自の決まりごとがあります。

また、江戸時代を舞台にした現代劇だけでなく、「時代物」と言われるはるか昔の物語にも、登場人物の性格をわかりやすく表現するために江戸時代の服装をもとにした衣裳が用いられています。

時代考証よりも、面白くわかりやすくを優先させた衣裳からは、歌舞伎がエンターテインメント性を大切にしていることが伺えます。

化粧とかつらは歌舞伎の象徴

歌舞伎の象徴とも言える「隈取（くまどり）」は、赤や青、茶、黒などで血管や筋肉の盛り上がりを誇張して表現する独特の化粧法です。赤の隈取は正義感を、青や茶は悪人や妖怪といったキャラクターを表します。赤は血気盛んな様子を表すことから、スーパーヒーローは赤の線がたくさん入った隈取をほどこします。赤い隈取でも動物や植物などをモチーフにしたものは、三枚目役です。

かつらの種類は千種以上あり、かつらを見るだけで、年齢や身分、職業、性格や精神状態までわかります。前髪があれば若者、まげが細ければ年寄り、たぼと呼ばれる首の上の部分がふくらんでいるのは町人というように、役柄によって細かな約束事が決められています。

演技で生かされる小道具

歌舞伎で言う「大道具」は、家や岩、背景など引っ越す際に持っていけないもので、「小道具」は食器やタンスなど持っていけるものという分け方をされています。登場人物が身につけている装飾品や生活用品、家具、乗り物、動物や植物など、小道具はたくさんありますが、中でも注目したいのが「消え物」と呼ばれる食べ物です。

劇中に登場する蕎麦やご飯は本物を使うことが多いですが、刺身や柿などは羊羹や和菓子で代用します。魚屋が捌くカツオは、乾燥したヘチマを整形して作られたフェイクです。本物も作り物も美味しそうに見えるのは、役者の演技力によるものかもしれません。

歌舞伎こばなし

楽しませてくれる名脇役

歌舞伎には、馬や牛、犬、ねずみ、狐、猪、鶏、象、虎などさまざまな動物が現れます。竜や化け猫など、想像上の動物も登場し、舞台演出に一役買っています。

大型の動物は前後に役者が入って動かし、犬や狐、化け猫などは着ぐるみのように着て演技をします。妖術使いが乗り口から煙を吐く大ガマのように、大掛かりなしかけがウリの動物もいます。棒の先につけられたネズミや鳥といった小さな動物は、黒衣（くろご）と呼ばれる係の人が、棒を動かすことで動いたり飛んでいるように見せます。

歌舞伎に登場する動物は、舞台を盛り上げ華やかにしてくれる名脇役なのです。